

新入生にすすめる 50冊の本



2016

[表紙写真：附属図書館本館特設コーナー]

図書館には「新生にすすめる 50 冊の本」のための書架が設けられています。
土曜日の図書館、くつろいだ雰囲気を読書を楽しみませんか？

<2016 年 2 月 6 日（土）撮影>

写真提供： 西尾 廣昭（薬学部・教授）

撮影場所：附属図書館本館

私たちの本棚にどうぞ！

皆さん、ご入学誠におめでとうございます。私たちは、生まれてからずっといろいろな言葉と出会ってそれを取り込み、自分を豊かにしてきました。それら出会った言葉の中で最もまとまりのあるものが「本」でしょう。私たちの頭（こころ）の中には、これまで出会った本たちが並んだ本棚があるはずです。今、その本棚をマイクロ・ライブラリーと呼んで、社会ではお互いの本棚への往き来を通じて人の輪を拡げる活動が静かに広まっています。この「新生生にすすめる 50 冊の本」は、福山大学の学生、教員、職員が皆さんを歓迎する気持ちをこめて大切な本を一人 1 冊ずつ紹介したものです。それは、福山大学の構成員それぞれの本棚への招待状ともいえます。ここに紹介された本を手にとることは、皆さんをさらに新たな本と人との出会いの場に導いてくれることでしょう。

福山大学附属図書館では、館内に学生の皆さんが紹介したい本を自由に並べるマイクロ・ライブラリーを設置しています。皆さんも、ぜひ来館してあなたの大事な一冊を並べて紹介してください。皆さんの来館を待っています。

福山大学附属図書館
館長 青木美保



人生の道しるべ

〈穴〉の中から人生のきらめきを見出す 青木美保
『穴（百年文庫 11）』カフカ, 長谷川四郎, ゴーリキイ 著 ……1

男女平等を阻むのは何?? 青野篤子
『何を怖れる フェミニズムを生きた女たち』松井久子 編 ……2

彼の物語は私にそうしてくれたように、あなたの「不可能」に
対する考えを大きく変え、困難に立ち向かう力を与えてくれる
事でしょう 石井あすか
『そして生かされた僕にできた、たった1つのこと』
ダン・カロ 著 ……3

悩める人のための不朽の名著 内田博志
『道は開ける』デール・カーネギー 著 ……4

上手に〈つながり〉を築けるようになるための本 大西海斗
『友だち幻想』菅野仁 著 ……5

二人の青年が自分の生き様について葛藤する物語 大松祐里
『ピンクとグレー』加藤シゲアキ 著 ……6

本があまり好きではない人にも、とても読みやすい一冊だと思います。
心に残るストーリー、言葉がつまっているのも、ぜひ読んでみ
てください 大森恵実
『世界から猫が消えたなら』川村元気 著 ……7

何ものにもなれない自分に苛立っているあなたへ 片桐重和
『幕が上がる』平田オリザ 著 ……8

- 工夫とは、出来るかどうかを考えるのではなく
どうやったらできるかを考えること 桑田成年
『ナッチャん』 たなかじゅん 著9
- 一緒にいることがあたり前になっている人に、改めて感謝の気持ち
があふれてくる本 新地彩加
『100 回泣くこと』 中村航 著10
- 生きることの生々しさがせまる！ 関田隆一
『ほとけの救い 仏教入門』 寺内大吉 著11
- 発明家、事業家、篤志家の古賀常次郎の人生は！！ 高橋佳美
『どがんね』 佐保圭 著12
- 人間は卑怯であったり、ずるかったりする
しかし、それでも美しくなることもできる 中澤孝夫
『君たちはどう生きるか』 吉野源三郎 著13
- 生活にメリハリをつけたいときや、
自分にやる気を出させたいときにオススメです 能丸琢朗
『心を整える。』 長谷部誠 著14
- フィリピン沖 300 マイルの海上から短艇で食糧・真水なしで 13 日
間漕いで生還した軍艦名取乗組員 195 名の奇跡の物語です 早川達二
『前任将校 軍艦名取短艇隊帰投せり』 松永市郎 著15
- こんな人生あり?! 山口泰典
『マンガ水木しげる伝 完全版』 水木しげる 著16

自分の胸にあるものを真摯に見つめるということ
『33 個めの石』 森岡正博 著 山崎理央
.....17



学びの道しるべ

読むだけでお腹がすいて元気になれる料理本です
『LIFE なんでもない日、おめでとう!のごはん』
飯島奈美 料理・スタイリング 伊藤日向子
.....18

本への愛情が伝わってくる一冊です
『読書からはじまる』 長田弘 著 大谷恭子
.....19

世間の「常識」に惑わされず、自分の狭い見方に決別しよう！
大塚 豊
『知的複眼思考法』 荻谷剛彦 著20

挑戦と感動の物語
『2005 年のロケットボーイズ』 五十嵐貴久 著 小林正明
.....21

世界・日本の歴史学習に活用を！
知っているようで、案外知らない歴史
清水厚實
『標準世界史年表』 亀井高孝 編
『標準日本史年表』 児玉幸多 編22

わたしが一冊の本を読んでいる間にも、世界中でたくさんの人が、
わたしたちのために新しい本を書いているのだ
高原有美
『晴れた日は図書館へいこう』 緑川聖司 著23

「正解」以外にも「別解」があるかもしれません
別解力を身につけて人生の選択肢を増やしてみませんか？

田村 豊
『〇に近い△を生きる』 鎌田實 著24

知ってほしい、病院の中にも「学校」を必要としている子供たちが
いることを。ここにこそ教育の原点がある

長崎信浩
『あかはなそえじ先生のひとりじゃないよ ぼくが院内学級の教師
として学んだこと』 副島賢和 著25

現在の社会を理解するためのやさしい歴史や経済の解説

服部 進
『池上彰のやさしい教養講座』 池上彰 著26

生き物を飼うことの面白さ

山岸幸正
『生き物を飼うということ』 木村義志 著27



科学の道しるべ

本物のサイエンス・フィクション！論理的な思考の大切さを教えて
くれる理系学生の必読書がこれだ！

酒井 要
『星を継ぐもの』 ジェイムズ・P・ホーガン 著28

何年も前に書かれているのにかわらず、
現在の社会問題を的確に捉えている不思議な本

杉原千紗
『アミ小さな宇宙人』 エンリケ・バリオス 著29

マツコロイドの生みの親が語る

竹盛浩二
『ロボットとは何か』 石黒浩 著30

データの見た目や先入観に惑わされず、
批判的な目線の大切さを考えさせられる本
『環境危機をあおってはいけない』 ビョルン・ロンボルグ 著・31
中重賢治

ブドウ栽培からワイン醸造までをシステム化して
地域を再生するモデルを築く！
『千曲川ワインバレー 新しい農業への視点』 玉村豊男 著
……………32
久富泰資

嘘じゃない！君はとてつもない幸運に恵まれたエリート！
『進化とは何か ドーキンス博士の特別講義』
リチャード・ドーキンス 著
……………33
松田文子

建築に芸術に社会に…いろいろなヒントを与えてくれる一冊です
『都市を変える水辺アクション』 泉英明 著
……………34
丸谷美貴

常識を疑う勇気をもつ
『巨大翼竜は飛べたのか』 佐藤克文 著
……………35
渡辺伸一



文学の道しるべ

大学生はもう大人!?だから知っておきたい大人のマナー!
『それマナー違反ですよ!』 岩下宣子 著
……………36
浅野優太

- 年月というのは人をいろんな風に変えていっちゃうんだよ
荒井 賢
『国境の南、太陽の西』 村上春樹 著 ……37
- 主演 岡田准一・榮倉奈々。大ヒットした映画
「図書館戦争」の原作をぜひ読んでみよう
岡崎麻依
『図書館戦争』 有川浩 著 ……38
- 見た目が周りと違っていても関係がない
大事なのは中身なのだから
柿本正司
『スイミー ちいさなかしこいさかなのはなし』 レオ・レオニ 作
……39
- 『指輪物語』の前日譚
20世紀最上のファンタジーはここから始まる
喜多村侑佳
『ホビット ゆきてかえりし物語』 J・R・R・トールキン 著 ……40
- 小さいときには分からなかったグリム童話の怖さが、
今、分かります
栗原希実
『大人もぞっとする初版「グリム童話」』 由良弥生 著 ……41
- 大学時代を自分のものにするために
伍賀正典
『青が散る』 宮本輝 著 ……42
- 妖怪の中でもちょっと特殊な豆腐小僧が、
自身の存在理由を求めて繰り広げる珍道中
小嶋英二郎
『豆腐小僧双六道中ふりだし』 京極夏彦 著 ……43
- 長い文章が苦手!でも本から何かを得てみたい…
そんな人におすすめの本
佐藤桃子
『蜘蛛の糸』 芥川龍之介 著 ……44

- 生きるとは？死ぬとは？その答えがここにある
 医学と社会史も盛り込んだ圧倒的ファンタジー
 『鹿の王』 上橋菜穂子 著
 末原理那
 ……………45
- 思い出が少しずつ、君からこぼれてゆく
 だから君が思い出すまで、僕は読む
 『きみに読む物語』 ニコラス・スパークス 著
 徳田 滯
 ……………46
- 楽しみながら学べるコミックエッセイ
 意外と知らない日本語がここにある
 『日本人の知らない日本語』 蛇蔵, 海野凧子 著
 臂 愛実
 ……………47
- 繰り返される非日常
 『秋の牢獄』 恒川光太郎 著
 平松佳之
 ……………48
- あなたも周りにもある小さな植物たちに目を向けてみませんか？
 『植物図鑑』 有川浩 著
 富士枝杏
 ……………49
- 純粋な恋愛小説が読みたいときに！必ず読み返したくなります
 『ぼくは明日、昨日のきみとデートする』 七月隆文 著
 山本彩名
 ……………50
- 本を読みたいけど、どの本を読めばいいのかわからない時は、迷わずこの雑誌!!
 『ダ・ヴィンチ』
 吉津悠子
 ……………51

備考：所属は平成 28 年 3 月現在です。



〈穴〉の中から人生のきらめきを見出す

『穴（百年文庫 11）』

カフカ, 長谷川四郎, ゴーリキイ 著（ポプラ社）

「百年文庫」は、様々な国の作家たちの短編小説から、穴・闇・暈など漢字一文字のタイトルが現す作品3篇を選び編集したもので、11冊目は、カフカ「断食芸人」、長谷川四郎「鶴」、ゴーリキイ「二十六人とひとり」の三篇が入っています。いずれも〈穴〉のような閉鎖的な場所で極限の生活をしている人たちが、そこで見出した人生の真実が輝くように描かれ、感動的です。私が特に好きなのは「鶴」です。これは、第二次世界大戦時にソ満の国境の大平原で敵陣地を監視する日本兵の話です。毎日望遠鏡で暗い砦の中から観察を続けていた兵隊たちは、ある日その中で一羽の鶴が飛び立つのを目撃。その直後一人の兵隊が逃亡、その直後ソ連兵が進攻、主人公はうたれ倒れます。しかし、その脳裏では広い草原に痕跡が残っていたかつての大きな道が現われて、そこをこちらに歩いてくる大勢の人々が見えてきます。国境線は消え、そこに真の生活が姿を現すのです。

青木 美保（人間文化学科）



男女平等を阻むのは何??

『何を怖れる フェミニズムを生きた女たち』

松井久子 編（岩波書店）

私が高校生のとき、男子は体育館で武道をし、女子は調理室でコロッケを作っていて、「何かおかしい」と思いました。1972年に大学に入学し、ウーマン・リブ（女性解放運動＝フェミニズム）と出会います。そこで、初めてわかったのです。あれは「性差別」だったのだと。今よりずっと女性差別が激しい時代でした。大学院進学も男性優先。就職も男性優先。「男は仕事・女は家庭」という性別分業。女性たちはそれがおかしいと思い始めました。全国各地で女性の運動が活発でした。女性たちは、ピルの解禁、ミスコン反対などを訴えました。社会の中でつくられたこのような運動がもとになって、男女雇用機会均等法や男女共同参画社会基本法ができたのです。映画監督の松井久子さんが、リーダー的な役割を果たした女性たちにインタビューをして映画を作り、それを活字にしたのがこの本です。おばあちゃんから、お母さんから、先生からも話を聞いてみてください。

青野 篤子（心理学科）



彼の物語は私にそうしてくれたように、
あなたの「不可能」に対する考えを大きく変え、
困難に立ち向かう力を与えてくれる事でしょう。

**『そして生かされた僕にできた、たった1つのこと』
ダン・カロ 著，奥野節子 訳（ダイヤモンド社）**

この本はダン・カロさんがプロのドラマラーになるまでを綴ったエッセイ本です。

彼は2歳の時、不慮の事故で命に関わる程の重症を負いました。何とか命をとりとめた彼を待っていたのは、壮絶な差別や偏見、日常生活上の困難の数々でした。

しかし、彼は常にプラス思考を持ち、諦めずに努力し続ける事により多くの困難を乗り越えて行きます。そして、彼は夢を叶え、「人に不可能はない」事と「プラス思考の大切さ」を証明しました。

私は、私もそうである様に誰でも不可能な事はあると思われがちなか中、諦めずに努力し続けて夢を叶えた彼の話にとっても感動しました。

夢を持っている方、困難に立ち向かう勇気がない方、いつも諦めてしまう方など沢山の方にお勧めできる本です。きっと、この本を読めば「不可能」の価値観が変わるはずです。

石井 あすか（人間文化学科1年）



悩める人のための不朽の名著

『道は開ける』

デール・カーネギー 著（角川書店、新潮社、創元社）

「道は開ける」という書名からは、人生で成功を遂げるための処世訓集というイメージを受けるかもしれませんが。しかし実は、この本の原題は“How to Stop Worrying and Start Living”。悩みを捨てて新たな心の持ち方を見つけるための指南書なのです。

1948年に英国で出版されて以来、世界中で1600万部、日本でも200万部が読まれてきた、名著中の名著です。日本では長らく創元社から出版されてきましたが、2014年に新たに新潮社版と角川文庫版が加わり、それぞれに異なる味わいの翻訳でカーネギーの言葉を伝えてくれるようになりました。

新しく大学生になった皆さんは、喜びや希望に胸を膨らませる一方、いろいろな不安や悩みも抱えていることでしょう。もし大学生活に行き詰まりを感じるものがあったら、この本のページを開いてみてください。救いになる言葉が、きっと見つかるはずです。

内田 博志（機械システム工学科）



上手に〈つながり〉を築けるようになるための本

『友だち幻想』

菅野仁 著（ちくまプリマー新書）

友だちは何よりも大切である。

でも、なぜこんなに友だちとの関係で傷つき、悩むのだろう。この本は大学に入学した事で周りの環境ががらんと変わり、友だち作りを一から始める人たちに、改めて友だちとは何なのか、なぜ友だちが必要なのか、を考えさせてくれます。

また、それだけでなく、現代の若者のいじめの問題や、グループ間でのルール関係による複雑な人間関係による殺人事件や、暴力行為に及ぶ危険性を再確認させられる本になっています。

新入生の皆さんは、これを機に、この本を手に取り、自分の今の友だちとの人間関係を見つめ直し、これからの友だちとの人間関係を見つめ直してみてください。

そして、これからの四年、人と人との距離感覚をみがいて、上手に友だちとのつながりを築いて下さい。

大西 海斗（人間文化学科 1年）



二人の青年が自分の生き様について葛藤する物語

『ピンクとグレー』

加藤シゲアキ 著（角川文庫）

この小説は主人公の、河田大貴とその幼馴染である鈴木真吾という、二人の青年が、芸能界という、華やかな世界の光と影の中で、葛藤しながらも、それぞれの道を進んでいくという物語です。

この物語の途中、鈴木真吾の姉である、唯の信条で、「やるしかない。やらないなんてないから。」という言葉がでてきます。私はこの言葉をとっても気に入っています。

私は、将来の夢にも、部活動にもそれぞれ目標があります。この本を読んだのは、その目標についての不安が大きくなっていたときでした。そんなときに、この「やるしかない、やらないなんてないから。」という言葉で、うじうじ頭で考えるくらいなら今、自分にできることを精一杯やって行動しようと思えました。

今回、私は、この物語のこの部分に共感し、影響を受けましたが、他の人が読んだらまた違う発見があると思います。なので、ぜひいろいろな人に読んでほしいです。

大松 祐里（人間文化学科 1年）



本があまり好きではない人にも、とても読みやすい一冊だと思います。心に残るストーリー、言葉がつまっているのも、ぜひ読んでみてください。

『世界から猫が消えたなら』
川村元気 著（マガジンハウス）

私のおすすめする本は、川村元気の『世界から猫が消えたなら』です。タイトルから多分みな不思議に感じるとは思いますが、この物語は一人の主人公の男性の人生と言ってもいい冒険の物語です。

主人公の「僕」は郵便局員として働いており、趣味は映画を見ることで、猫と二人暮らしをしていましたが、ある日突然脳腫瘍と診断され余命宣告を受けます。

そんな状況の中「悪魔」という男が現れ、この世界から何かを消す代わりに一日だけ命を得るという取引を持ちかけてきます。僕は生きるために世界から消すことを決断し、電話、映画、時計などを命と引きかえに消していくと同時に、思い出やいままでの自分の人生をふり返ります。

私はこの本を読んで幼かった頃は気づかなかったことを、今になって気づくという、主人公の心の変化を見て人間らしいなと思い、共感できました。「僕」だけでなく家族、猫、悪魔みなストーリーの中心でもあり、大切なことに気づかせてくれる存在でもあったと思います。

大森 恵実（人間文化学科 1年）



何ものにもなれない自分に苛立っているあなたへ

『幕が上がる』

平田オリザ 著（講談社文庫）

片田舎の小さな高校の演劇部の一年を演出家（高校生）の目線で刻んだお話です。

一つの物事を違う視点から切り取ると、その時、そのタイミングで見える・感じる世界はまったく別のものに感じた経験をしたことはありませんか。

そこには、それぞれの世界が広がっているのだけれど、それでも、一つの物事はひとつで、その違って見える世界観によって、人は理不尽に感じたり、共感を覚えたりします。

そんなどこにでもあるような日常を過ごす小さな高校の演劇部をとりあえず任された部長のさおりが、演劇を演出するというこで、多くの人や作品と出会い、時には笑い、悩み、喜び、もがき、裏切られながらも成長していく青春物語です。

片桐 重和（共同利用センター）



工夫とは、出来るかどうかを考えるのではなく
どうやったらできるかを考えること

『ナッチャン』

たなかじゅん 著（集英社）

私のおすすめは漫画です。ただし、この本は普通に「あ～おもしろかった。」で終わる娯楽漫画ではありません。考え、工夫する事の面白さ、組織社会のあり方について考えさせられる一冊です。

父の亡くなった後、しぶしぶ鉄工所を継いだ主人公「ナッチャン」。町の中小企業からは、不可能とも思える機械の修理が殺到。その難題を、自らの知恵で一つずつ解決していく漫画です。大手メーカでの対応の仕方、町工場での考え方の違いが如実に描写されています。技術的な側面から、また経営的な側面からも二重に楽しめるシリーズです。工学部生が読む時は、出される難題に対して、自分なりに前もって考えてから、読み進めるようにすると、より面白みが増すと思います。

最後に、「物事には必ず解決方法はある！」その精神を持たせてくれる一冊です。

桑田 成年（職員）



一緒にいることがあたり前になっている人に、
改めて感謝の気持ちがあふれてくる本

『100 回泣くこと』
中村 航 著（小学館文庫）

私が新生生にすすめたい本は、『100 回泣くこと』という本です。この作品はあるカップルの物語で、プロポーズもし、同棲もして幸せだったところでいきなり彼女が病気になってしまう話です。

二人で頑張っていた闘病生活でしたが彼女は亡くなってしまいます。

この本を読んでいるととても悲しい気持ちになり、涙が止まりませんでした。病気を題材にした話は他にもたくさんあり、どれも悲しく切ない気持ちになってきました。自分や自分の周りの大切な人達が病気になってしまうことを考えると苦しくて仕方がありません。大切な人を残してしまう方も辛いと思います。

この本を読んで、改めてあたり前の幸せをあたり前だと思わず感謝していこう、大切な人達を今よりもっと大切にしよう、と以前より強く思いました。

新生生のみなさんにも、ぜひこの本を読んで私と同じ気持ちになったり、人それぞれ命について様々なことを考えてみてほしいと思います。

新地 彩加（人間文化学科 1 年）



生きることの生々しさがせまる！

『ほとけの救い 仏教入門』

寺内大吉 著（心交社）

著者は浄土宗大本山増上寺の法主という超偉いお坊さんなのに直木賞作家（ペンネームがお坊さんらしい）で、スポーツやギャンブルの解説も得意という多才人だ。平成20年に遷化されたが、私は最後の法話をたまたま小さな寺で聴くことができた。堅苦しい話は一切なく、ご自身の思い出や考えをゆっくりと話していただけたのに、それがプレゼンテーションの鑑で、場にいた全員が生きることの喜びと苦しみを考え、しかも爽快な世界に引き込まれた30分だった。本書で誰でもそれを体験できる。私は普段から本書をめくり、最後の法話の場で和尚から話を聞いている気分になり、つまみ読みをしている。仏教入門という書名で「宗教は・・・」と敬遠しない方が良い。経典と名僧の言葉を解説しているが、色恋、ギャンブル、犯罪何でも出てきて、おもしろくて読むのをやめられない。なぜ勉強するのか、親、友達って何だろうと少しでも考えるのなら学生に限らず教職員もこれだ！

関田 隆一（スマートシステム学科）



発明家、事業家、篤志家の古賀常次郎の人生は！！

『どがんね』

佐保 圭 著（日経BPコンサルティング）

『どがんね』は佐賀弁で、古賀常次郎が人に話をした後の口癖で「どうですか？」「いかがですか？」といった意味です。

古賀常次郎は日本の発明家です。地元と全国でも一部では比較的有名な人ですが、世間にはあまり名前を知られていないようです。

今回、私も図書館で本を手にして初めて名前を知りましたが、古賀さんの人生がすごい！

小さい頃から父親に暴力を受け満足に学校にも行けず勉強は苦手でしたが、学校や友達と遊ぶことが大好きでガキ大将としてずいぶん活発だったようです。警察のお世話にもなりました。今のように学歴社会では無い時代でも就職して、学歴の壁にぶつかり、定時制高校へ進学します。決めた事は必ず実行する！守る！！という性格で、高校時代は4年間皆勤賞。嘘は付かない、人のせいにしない、困難を苦とせず、自分で道を切り開きます。

「正直かつ真面目に人生に立ち向かえば、きっと道は開ける」どんな人生だったかこの本を手にとって読んで確かめてください。

高橋 佳美（職員）



人間は卑怯であったり、ずるかったりする
しかし、それでも美しくなることもできる

『君たちはどう生きるか』

吉野源三郎 著（岩波文庫）

この本は 1937 年の作品で、もう 70 年も前のものですが、お父さんを亡くしたコペル君というニックネームの中学生の、友情や失敗を通して精神的な成長をとげる作品で、傷つくことが人間の尊厳と楯の裏表になっていることを教えてくれる素晴らしい物語です。

多くの学生が「この本を読んで自分の心の中に心棒みたいなものが通った気がした」とか「これからの人生に立ち向かえるような気がする」と語っています。

中澤 孝夫（税務会計学科）



生活にメリハリをつけたいときや、自分にやる気を出させたいときにオススメです。

『心を整える。』

長谷部 誠 著（幻冬舎）

この本は、サッカー日本代表主将、長谷部誠選手の「勝利をたぐり寄せるための56の習慣」が書かれた本で、主にメンタル面や生活面について書かれています。人との付き合いも大事だけど、自分と向き合う時間を大切にしよう、というようなことだったり、苦しいことに対する向き合い方、あえて難しい道を選んでみよう、ということが書かれています。

特に読んで欲しいところは、第7章の「想像する。」です。普段から最悪の状況を想定しておくことや、相手の気持ちを想像し、理解すること、勝負所を見極め、目標を達成しそうなときは「もうすぐゴール」と意識するのではなく、いかにかっこよくゴールするか意識すること、他人の失敗を自分の教訓にすることなどが書かれています。

注目して読んでほしいところは、楽な方に流されないということが書かれていることです。誰でも楽な方が簡単だし、そっちを選びたくなるけど、楽な方ばかり選ぶのはいけないということが学べました。

能丸 琢朗（心理学科3年）



フィリピン沖 300 マイルの海上から
短艇で食糧・真水なしで 13 日間漕いで生還した
軍艦名取乗組員 195 名の奇跡の物語です。

『前任将校 軍艦名取短艇隊帰投せり』
松永市郎 著（光人社 N F 文庫）

1944 年 8 月、フィリピン沖 300 マイルの太平洋上で、軍艦名取が敵潜水艦の魚雷で沈められた。この本は 3 隻の短艇(カッター)に分乗した 195 名の乗員の奇跡的な生還の記録である。常識から考えるとフィリピン行きは不可能と言えた。短艇隊員は食糧、真水、方位磁石等の航海用具もなく、1 日僅かのビスケットを食べ、雨水をすすった。暑い昼間は睡眠と休養にあて、交代しながら、夜間に 1 日 10 時間漕いだ。13 日間の集団移動が成功した原因は、指揮者である 27 歳の前任将校(短艇隊の航海長)の成功への信念と冷静な決断力、並びに隊員全員の自信と団結力であった。隊員は励まし合い、星座を見て西方への針路を見つけた。こんな極限状態を体験して生き延びた人々は、その後の人生を本当に有意義に過ごされたに違いない。

そして、こうした話を読むと、我々が普段直面する様々な困難にも「為せば成る」という思いで立ち向かっていける強い気持ちが自然と湧いてくる。

早川 達二（経済学科）



こんな人生あり？！

『マンガ水木しげる伝 完全版』
水木しげる 著（講談社漫画文庫）

「ゲゲゲの鬼太郎」で有名な水木しげる（本名、武良茂）氏の自分史ですが、この人生が凄すぎる。水木氏いわく、「毎日がつまらんとする人は、この本を読むといいですよ。きっとフハッと驚いて、生きる意欲がわいてきます。」まさにその通りです。私は、何十回読んだか分かりませんが、ともかく飽きません。昭和（戦前、戦中、戦後）と平成の世の中の不条理が、これでもかと思われに水木氏に押し寄せてきます。それを深刻にならずに乗り切ってゆく水木氏自身を、ユーモアを散りばめて描いています。だから読んでも全く疲れないのですが、そこに描かれている近代・現代日本の人間社会はどんな歴史書よりも、リアリティーを持って読者に迫ってきます。その時代、その場の空気感まで分かると言っても良いでしょう。NHK 連続ドラマの「ゲゲゲの女房」は、水木氏の魅力のほんの一部だけです。だまされたと思って、ご一読を。

山口 泰典（生物工学科）



自分の胸にあるものを真摯に見つめるということ

『33 個めの石』

森岡正博 著（春秋社）

書名の「33 個めの石」とは、2007 年に米国で起きた銃乱射事件で、32 人の犠牲者を悼んで同じ数の石が置かれたところに、事件直後に自殺した犯人のために誰かがそっと置いた石のことです。石はすぐに持ち去られ、するとまた誰かが新しい石を置いたといえます。米国とは異なる文化圏に住む著者が、自分をはたして置くことができるだろうかと問いかける「33 個めの石」とは、私たちそれぞれにとって何をさすのでしょうか。

「赦すということ」「自殺について」「『人道的』な戦争」「差別と偏見」「男らしさ、女らしさ」……私たちの生きる現代社会に関わるテーマが、見開き 2 ページずつの短いエッセイに綴られています。柔らかく落ち着いた語りを読者に示してくれるのは、問題の答えではなく、むしろ答えの見えない問いへの入り口でした。「自らを棚上げにせず」、問いを前にした自分の胸に生じるものを真摯に見つめる著者の姿勢に心を動かされました。

山崎 理央（心理学科）



読むだけでお腹がすいて元気になれる料理本です

『LIFE なんでもない日、おめでとう!のごはん』
飯島奈美 料理・スタイリング（東京糸井重里事務所）

映画、ドラマ、CM など様々な映像媒体に出てくる料理を手掛けている方の料理本です。特別な技法や材料が不要な料理ばかりで、だしのとり方や調理器具の揃え方などが丁寧に紹介されており、まさに料理の参考書のように作られています。

一人暮らしの方は挑戦することで達成感が得られ、また実家から通学している方も、誰かとワイワイしながら楽しく作れるような料理がたくさん載っています。

出てくる料理をテーマに、様々な分野で活躍されている方々のエッセイも読みごたえがあり、一つ一つのエッセイにしんみりしたり、楽しくなったりといろいろな思いを引き出してくれます。

この本はシリーズがありますが、共通しているのが「何でもない日、おめでとう」をテーマにしていることです。何でもない日常がおいしい料理や料理に向き合う時間を通して、かけがえのないものになれるようにと、本を製作している方々の思いや愛情が詰まっています。

伊藤 日向子（生命栄養科学科）



本への愛情が伝わってくる一冊です

『読書からはじまる』

長田 弘 著（NHK 出版）

この本は、読書の技術的な方法論ではありません。著者は詩人で哲学的な内容もあり、読んでいくと、自分の中で形になっていくような感覚がもたらされました。「読まない本」の大切さや、本を友人として考えたり、「読書のための椅子」について真剣に語り、全篇から長田氏の「本」「読書」に対する敬意と愛情が伝わってきます。

いい本だと薦められた本の良さが読んでもわからなかった時や、感動した本だったのに詳細が思い出せなかった時、自己嫌悪のような気分になることがありましたが、この本を読むと、前向きに気軽にもっと読書を生活に取り入れてみたい気持ちになりました。

「本は読んでも忘れることができる、忘れたらもう一回読めばいい」「再読のチャンスを自分にあたえることで、読書という経験を、自分のなかで、絶えず新しい経験にしてゆくことができる」と著者は言っています。

大谷 恭子（職員）



世間の「常識」に惑わされず、
自分の狭い見方に決別しよう！

『知的複眼思考法』

苅谷剛彦 著（講談社＋α文庫）

子どもの頃、理科の教科書の載っていたトンボの眼の写真を見て、こんな眼を持っていたら周りの世界はどう見えるんだろうと想像したことがありました。つまり「複眼」です。その言葉をタイトルに取り入れた本書の著者は、東大教授では飽き足らず、海の向こうに飛び出して、オックスフォード大学教授として活躍する教育社会学者です。『大衆教育社会のゆくえ』ほか、学歴社会や平等主義をめぐる専門的学術成果も数多い著者が、物事を多面的に捉えることの重要性とその方法について、分かり易く論じています。自らのアメリカ留学体験を含む人生の随所で身につけた種々の手法、考える術がちりばめられています。例えば、短絡的あるいはステレオタイプな見方を排す。分かったつもりで普段何気なく使っている抽象的概念を疑ってかかり、他の言葉で言い換えて見る。目の前の問題（事象）に内在する複数の要素・要因と、それら間の関係に絶えず注意する等々。大学での「学び」に欠かせない批判的創造的思考力を手に入れる絶好のヒントに溢れています。

大塚 豊（大学教育センター）



挑戦と感動の物語

『2005年のロケットボーイズ』

五十嵐貴久 著（双葉文庫）

この本は、学生たちが人工衛星を作るコンテストに参加する話です。大きなプロジェクトに挑戦するためにはさまざまな困難があります。主人公は専門的な知識もほとんどないなか仲間を集めプロジェクトの挑戦を始めていきます。順調に進んでいたプロジェクトも仲間割れや資金難など様々なトラブルに遭遇します。この本の主人公もこの挑戦がその後の人生を大きく変える結果となっています。挑戦するものが大きければ大きいほど、また、困難が大きいほど成し遂げたあとの感動も大きくなります。この本は、苦勞を乗り越えて挑戦することへの感動に出会うことができる話です。

これから希望に満ちていろいろなことに挑戦していく新入生にはぜひ読んでいただきたいと思います。

小林 正明（機械システム工学科）



世界・日本の歴史学習に活用を！
知っているようで、案外知らない歴史

『標準世界史年表』 亀井高孝 編
『標準日本史年表』 児玉幸多 編
(吉川弘文館)

日本並びに世界の歴史年表は、私が常に枕元において座右の書として活用しています。

それは、日常の生活や勉強の中で、世界や日本の歴史についての疑問や知りたいことが起こった場合、この両書を活用することにより、世界や日本の歴史について、改めて眼が開かれるからです。案外、知っていると思っていることも、あいまいであったり、思い違いをしていることも多いと思いますので、本書を開くことにより、事実をしっかりと把握できるからです。

内容は、世界史年表の場合、紀元前からの世界の歴史が一目でわかるような、世界史対照年表はじめ、BC3000年から今日までの政治、経済、文化、宗教などを詳しく紹介しています。

日本史年表では、BC2000年前から今日までの歴史年表はじめ、政治、外交、社会経済、文化に併せ、東洋・西洋の歴史をも対比して利用できるようになっています。日本及び世界の歴史の学習に活用してほしいと思います。

清水 厚實 (理事長)



わたしが一冊の本を読んでいる間にも、
世界中でたくさんの人が、
わたしたちのために新しい本を書いているのだ。

『晴れた日は図書館へいこう』
緑川聖司 著（ポプラ文庫ピュアフル）

この本の主人公は、本と図書館が大好きな、小学校5年生の女の子、しおりちゃんです。物語の舞台は、まちの図書館です。図書館の日常や本と利用者に関する謎を、図書館司書と、利用者のしおりちゃんを通して物語は描かれます。この本を読んで驚かされたのは、図書館でよくある日常や巻き起こる問題を詳しく、ちょっとしたミステリー仕立ての物語にしているところです。

最大のポイントは、主人公が悩み、考え、時には図書館司書といっしょに、大きく成長する姿だと思います。図書館のマナーや司書の仕事内容、図書館の歴史などに物語を通して触れ、理解を深められます。本が好きで、よく知っている人はもちろん、図書館を普段あまり利用しない人にもぜひおすすめしたい1冊です。

さあ、図書館へいこう！

高原 有美（職員）



「正解」以外にも「別解」があるかもしれません。
別解力を身につけて人生の選択肢を増やしてみませんか？

『〇に近い△を生きる』

鎌田 實 著（ポプラ新書）

「正解」以外の「別解」を見つけられると人生の幅が広がり、少し楽に生きていくことができる。そんなことが分かる本です。

小学校から大学まで、学校では一つの正解「〇」を見つけ出すための方法をたくさん教えます。しかし実社会では、完全な正解がなく別解がたくさん存在するような問題にしばしば遭遇します。「〇〇でなければダメ！」という一元的な考え方よりも、「△△でもいいかもしれない？」という別解を見つける（別解を見つけるようとする）能力の大切さがチェルノブイリ原発事故やイラクの救援活動を長年続けている著者自身の体験をもとに語られています。

新書には「難しい」とか「堅苦しい」といったイメージがあるかもしれませんが、この本は、鎌田實氏自身の体験に基づいた話や対談が中心なので気楽に読んでいくことができます。大学生になったことを契機に「新書」にもチャレンジしましょう！

田村 豊（薬学部）



知ってほしい、病院の中にも「学校」を必要としている
子供たちがいることを。ここにこそ教育の原点がある。

**『あかはなそえじ先生のひとりじゃないよ
ぼくが院内学級の教師として学んだこと』**

副島賢和 著（学研教育みらい）

家族と離れ、病気の不安に悩み、クラスメイトに忘れられてしまうことを何より怖れる入院中の子供たち。

病気を抱える子供たちとのかかわりの中で自らが学び実践したことを、子供たちがその時々で作った詩と子供たちの生の声を交えて紹介している。相手を大切にすること、励ますことと褒めること、身体と心の痛みに寄り添うためにできること、感情への受容と行動への許容、病気との共存を受容する子供の苦悩に寄り添う、ただどこにいても幸せ、自分が大切だからひとが大切、笑顔の力。紹介された多くの事例、そこにあるのは教育の原点であり、人と人の交わりの原点でもある。いのちを紡ぐことができない子供たちに今何をしてあげられるのか、隣にいる友人にとって自分はどのような存在なのか、自分は決してひとりではない、分かってくれる人が必ずいるのだ。

多くの学生はもとより、医療人薬剤師を目指す薬学部の学生には是非読んでいただきたい一冊である。

長崎 信浩（薬学部）



現在の社会を理解するための やさしい歴史や経済の解説

『池上彰のやさしい教養講座』 池上 彰 著（日本経済新聞出版社）

学生と話をしていると、歴史や経済のごく基本的な知識がないことに時々愕然（がくぜん）とします。これはわたし自身にとっては同時進行してきた社会が、学生にとっては生まれる前、あるいは幼いときに起きた遠い過去の話が起点だからです。わたしの先輩諸君も私たちの世代に同じ思いを抱いたに違いありません。

歴史、経済、文化などなど教養と呼ばれる科目の役割は目に見えませんが、実に大きなものがあります。私たちの学生時代は（よくわからないくせに）無理やりでも読書をした世代ですが、今はそういう時代ではありません。

著者は以前こどもニュースで知られた人で、その博学とやさしい説明のため、実はこの番組は大人が見ていました。イスラムの話から沖縄の米軍基地の話、長い経済不況とアベノミクスの話まで、やさしい解説と押しつけでなく、読者自身に解決を考えてもらう書き方です。いずれ社会に出て行く学生諸君の助けになる一冊です。

服部 進（情報工学科）



生き物を飼うことの面白さ

『生き物を飼うということ』

木村義志 著（ちくま文庫）

生き物を飼うことに熱中した経験はありますか？本書では「生き物を飼うこと」の魅力、そして「飼うことが好きな人」の性（さが）が何とも小気味よく語られています。筆者は言います、「実際に生き物を飼うとなると、汚い、臭い、死ぬ、手間がかかる、家族に嫌がられる…それでも『生き物を飼うことが好きな人』というのは、生き物をただ眺めているだけではどうも満足できない。飼育にともなう手間や憂鬱など、どこ吹く風、生き物との暮らしにどっぷり浸かり、気がつけば家の中は生き物だらけになっている。」そう、子供の頃の私も（筆者の足元にも及びませんが）まさにそんな一人でした。面白そうなものがいたらとにかく飼いまくっていたという筆者のエピソードから、豊富な経験からの実践的な飼育法の解説まであり、飼うことが好きな人もそうでない人も、驚きと発見に満ちた飼うことの世界を存分に堪能できる、そんな一冊です。

山岸 幸正（海洋生物科学科）



本物のサイエンス・フィクション！
論理的な思考の大切さを教えてくれる
理系学生の必読書がこれだ！

『星を継ぐもの』

ジェームズ・P・ホーガン 著、池央耿 訳（創元 SF 文庫）

ランキングに必ず登場する第一級の SF で、アニメの「映画版 Z ガンダム」や「不思議の海のナディア」などではタイトルがオマージュされ、センス・オブ・ワンダーに満ちた内容で数多くの SF 系クリエイターに影響を与えている作品です（気になる人は調べてね）。

ストーリーは、月面上で見つかった宇宙服を着た遺体の死亡時期が 5 万年前だったことから始まります。この謎の解明に、物理学、生物学、言語学などの多分野の学者が集まり、地球から月、木星の衛星ガニメデに舞台を移しながら断片的事実を積み重ねて、最後に人類誕生に関わる結論を導き出すという話です。

私が「理系学生の必読書」と言う理由は、論理的な思考と実証の積み重ねによって仮説を立証していく主人公たちの姿勢に、「研究や勉強するということはこういうことが大切なのだ」と共感するからなのです。読んでもらえれば、「なるほど…この感覚ね」ってわかってもらえると思いますよ。

追伸：この本は 3 部作の最初で、「星を継ぐもの」の真の意味は、続編を読んで初めて納得…なんですけどね。

酒井 要（建築学科）



何年も前に書かれているのにかかわらず、
現在の社会問題を的確に捉えている不思議な本

『アミ小さな宇宙人』

エンリケ・バリオス 著，石原彰二 訳（徳間文庫）

この本は一見子ども向けに書かれていますが、是非とも大人達を読むべき本です。

内容はペドゥリートという少年とアミ（アミーゴ：友達の頭文字）という宇宙人の話ですが、科学技術の問題、真理、哲学といったとても内容の濃い話になっています。また、この本は世界 11 ヶ国語に翻訳されたベストセラーとなっており、世界でも注目されています。

中でも非常に興味深いのは、何年も前に書かれているにもかかわらず、現在 2010 年代の社会問題を的確に捉えている点です。フィクションのようで内容は現在とぴったり。実話なのでは？という声も読者がよく投稿しています。

これからの社会の未来を築き上げる新入生のみならず、幅広い皆さんに是非ふれて欲しい一冊です。

杉原 千紗（生物工学科）



マツコロイドの生みの親が語る

『ロボットとは何か 人の心を映す鏡』

石黒浩 著（講談社現代新書）

2014年秋、石黒浩氏の講演を聴く機会があり、ロボットの話だけではなくて、人間についてずいぶん多くのことを考えさせられた。

石黒氏自身をモデルとしたアンドロイド「ジェミノイドHI-1」は、石黒氏に代わって講演もするのだという。石黒氏は、人間酷似のロボット研究の第一人者であり、世界中から注目を集めている。

講演は、すべてが刺激的であった。ロボットを通して人間を知りたいという根源的な熱意を基底に据えながら、ロボットと人間の未来についての創造的な話が繰り広げられた。

人間への様々な思いを膨らませることができた。講演を通しての石黒氏とのこの出会いが、ロボット研究者でもない私が、石黒氏のこの本を紹介する所以なのである。

副題に、ロボットは「人の心を映す鏡」であると言う。帯には「知的興奮で三日三晩眠れなくなること必至である」とある。

竹盛 浩二（大学教育センター）



データの見え方や先入観に惑わされず、
批判的な目線の大切さを考えさせられる本

『環境危機をあおってはいけない』

ビヨルン・ロンボルグ 著，山形浩生 訳（文藝春秋）

著者は、データを基に現在の環境問題における「定説」がいかにデータに基づいていないかを紐解きながら当時の環境問題に疑問をぶつけています。著者の主張は、「環境問題についての対策が不要」というものではありません。著者は「問題の現状をきちんと把握した上で、最も有効な施策を行うべきだ」と述べています。

この本を手にとった時も今も、私は環境問題は重要であり、早急に対策を考えなければいけないことだと思います。人は自分の意見と同じ意見ばかり耳を傾けがちですが、違う意見を聞くことによって、自分の意見のどこが間違っているのか、または相手の意見のどこが間違っているのかもわかると思います。

本書は書かれてから、だいぶ時間が経過している中で、今の環境問題に対する動きに対応していないところもありますが、著者の視点や考え方は分野を問わず参考になると思いました。

中重 賢治（心理学科4年）



ブドウ栽培からワイン醸造までをシステム化して 地域を再生するモデルを築く!

『千曲川ワインバレー 新しい農業への視点』 玉村豊男 著（集英社新書）

この本は、日本全国の地方が今直面している人口減少や文化的・経済的衰退に対して、どのような復活のモデルがあるかということを提示してくれます。1次産業である農業を含めた地方の疲弊がさげばれて久しくなります。経済や文化が中央に一極集中する問題の解決策として、里山の再生が提唱されるようになりました。

著者の玉村豊男氏はフランス文化などのエッセイを得意としていましたが、あるとき一念発起して、長野県の東御市にブドウ栽培からワイン醸造までを一貫して行う独自のワイナリーを創設しました。この近辺はワイン特区に認定され、玉村氏の発案で千曲川ワインバレープロジェクトを立ち上げました。玉村氏らはワイン醸造を志す若者を支援して、ワインを主軸とした近縁の産業を切り開くことを始めました。いわゆる地域の再生モデルです。この本の中には、どのようにしたら地域の活性化を促すことができるかというヒントがたくさん含まれています。

久富 泰資（生物工学科）



嘘じゃない！

君はとてつもない幸運に恵まれたエリート！

『進化とは何か ドーキンス博士の特別講義』
リチャード・ドーキンス 著, 吉成真由美 編訳 (早川書房)

もしあなたが今自分の存在意義に疑問を感じ、生きている意味をあまり感じる事が出来ないで悩んでいるなら、ぜひ、この本を読んでみましょう。

あなたも、年に一二回はお墓参りをしますよね。お墓にはあなたのご先祖様が祭ってあるわけですが、あなたもそのうちご先祖様になります・・・「縁起でもない」と、気を悪くしないでください。確実にご先祖様になります、確実にご先祖様になれる資格を手に入れているとも言えます。滅多なことでは、この資格は手に入らないのです・・・途方もない能力のあるエリート（少数精鋭）だけが、とてつもない幸運に恵まれて手に入れることが出来るのです。

ドーキンスは言います。「私たちは、スポットライトの中で生きている」と。なんと、晴れがましい！

生きる意味を生物進化論の立場から知り、勇気づけられる本です。

松田 文子（学長）



建築に芸術に社会に・・・
いろいろなヒントを与えてくれる一冊です

『都市を変える水辺アクション』
泉英明 著（学芸出版社）

『文明は「水辺」から生まれた』『生命の起源は「水」である』

どちらの言葉も一度は耳にしたことがあるかもしれませんが。

文系にとっても理系にとっても「水」というものが大切な要素であることがわかります。

そんな水辺を面白く、楽しく、そして明るい空間に創り上げようとする全国各地の動きをご存知ですか？大阪やソウルを旅するアヒルの存在は？広島の水辺と世界の水辺の関連は？水辺をデザインする上での約束ごとは？

この一冊で簡単に知ることができます。

「専攻したい分野じゃないから…」「文系だから建築なんて…」と拒絶するよりも、まずは是非手にとってぱらぱらとページをめくってみてください。

意外なところに思わぬ研究のヒントが隠されているかもしれません。

丸谷 美貴（職員）



常識を疑う勇気をもつ

『巨大翼竜は飛べたのか』

佐藤克文 著（平凡社新書）

恐竜が陸上を闊歩した時代、大空は巨大な翼竜が支配していたと誰もがイメージするだろう。現生動物の行動を研究する動物学者である著者は、さまざまな鳥の飛翔能力や体のサイズ、翼の形状を比較して、ある法則を導き出した。それに基づけば、「翼竜は飛べるはずがなかった」というのが結論である。

当初、古生物学者や恐竜ファンからは「机上の空論だ！」と批判が殺到したようだ。しかし、実際に翼竜が飛ぶ様を見た人はいないのだ。著者の研究は、自ら手で掴んだ動物から得られた野外調査の結果をもとにしている。研究とは、過去の知見から学び、さらに新たな挑戦を経て、誰も知らない新しい事実を発見することである。過去の知見を学ぶことは、学生にとって重要なことだ。しかし、必ずしも過去の知見が正しいとは限らない。研究者（人）として大切なのは、自分で観て感じた事実を信じるべきであると、著者は伝えたいのではないだろうか。

渡辺 伸一（海洋生物科学科）



大学生はもう大人!? だから知っておきたい大人のマナー!

『それマナー違反ですよ!』

岩下宣子 著 (宝島社)

これまでの学校の授業でマナーについて学んだことはありますか?

おそらく、「そんな授業を受けたことはない」って返事が返ってくると思います。

そんなあなたに勧めたいのがこの本です。

行事作法や食事マナー、言葉遣いや言い回し、将来を見越した仕事マナーもこの1冊で気軽に学べてしまいます!

意外と気づかないマナー違反、それで恥をかく前に一読しておけば出来る大人の仲間入り!

この本では、1つのお題を1ページで短くまとめており、さらにイラスト付きで解説されています。長ったらしい文を読む必要は一切ありません!

また、この本の特徴は正解から学ぶのではなく、よくある失敗例を見てから、正しいマナーを紹介してくれています。なので、実際にマナーを意識する場面がよりわかりやすくなっています。

もしも、マナーに自信がない、まわりの人より一歩先の大人を目指したいというならば、ぜひ一度目を通してはいかがでしょうか?

浅野 優太 (心理学科3年)



年月というのは人をいろんな風に変えていっちゃうんだよ。

『国境の南、太陽の西』

村上春樹 著（講談社）

この小説に出てくる始(はじめ)はとても酷いことをしてしまいます。それはもう、なんちゅークソヤローだ!というくらい酷いことを、身近にいて大切にすべき人にしてしまいます。

始はこの小説で、37 くらい年をとります。20 歳を過ぎたころ始は、自分が犯した過ちについて、それが自分自身の持つ本来的な傾向のようなものであったのかもしれないと思って、酷く暗い気持ちになりました。そういう場面がありません。何となく、印象的でした。

さて、このごろ文学に登場する「悪」があまり語られなくなっているそうです。それを嘆く方がおられました。だからといって、僕に何かができるというわけではないのですが、せっかくなので、少しだけ語らせてもらいます。

たぶん、悪を「臭いもの」と仮定して「臭いもの」の蓋を開けてみることも、人間を知るためには必要なのだと思います。

荒井 賢（人間文化学科 2 年）



主演 岡田准一・榮倉奈々。大ヒットした映画、
「図書館戦争」の原作をぜひ読んでみよう

『図書館戦争』

有川浩 著（メディアワークス）

映像化で話題となった図書館戦争である。作者は数々のベストセラーを出した有川浩さんです。

この本の舞台は、検閲を行う機関と、それに対抗する図書隊との戦いの様子です。このあたりは、映画などでリアルに表現されています。私がすすめる原作のポイントは、主人公の郁や周りの人間の心情の様子です。映像だけでは伝えきれないことが細やかに描かれていてとても共感できるシーンがたくさんあります。

また、映画ではあまり描かれなかった、上官の堂上の葛藤や友人柴崎の想いが伝わってくるため、映画を見るときみあげてくるものがあります。そして、この世界の国の地方との争いの仕組みや憲法の意義、政治への無関心さなど、コメディだけではなく、まじめな側面も詳しく知ることができます。

映画にはなかった、胸キュンシーンなども存在する原作をぜひ、読んでほしいと思います。

岡崎 麻依（心理学科1年）



見た目が周りと違っていても関係がない。
大事なのは中身なのだから。

『スイミー ちいさなかしこいさかなのはなし』
レオ・レオニ 作，谷川俊太郎 訳（好学社）

皆さんも1度は読んだ事のある本、スイミー。この本は小学2年生の国語の教科書にも載っています。「スイミー」は、仲間は皆赤い中、スイミーという魚だけが黒い色で生まれてしまいます。スイミーは周りとは色が違うということだけで、周りの赤い魚たちから仲間はずれにされてしまいます。

しかし、そこにスイミーたちの前に大きな魚が現れます。果たしてスイミーたちは、この大きな魚相手にどうするのか。そしてスイミーは皆と仲良くなれるのか。「スイミー」を読んだら、仲間たちとの絆、大きな敵に立ち向かう勇気など、たくさんの事を考えさせられます。皆さんももう1度読んでみてください。これは絵本の中だけ話ではなく、現実の色々なことを考えさせられるものになっています。

表紙は水色を中心とした色で、水彩画で絵を描いていて、暖かみがあり、心落ち着く絵本になっています。

柿本 正司（メディア・映像学科1年）



『指輪物語』の前日譚。

20世紀最上のファンタジーはここから始まる

『ホビット ゆきてかえりし物語』

J・R・R・トールキン 著，山本史郎 訳（原書房）

皆さんは『指輪物語』をご存じでしょうか？2001年から2003年にかけて、全三部作で映画化された、架空世界“中つ国”を舞台としたファンタジー小説です。本書はその物語の前日譚にあたり、2012年から2014年にかけて映画化され、大きな話題を呼びました。

内容は児童文学よろしく、至って平凡なホビットである主人公ビルボが、魔法使いやドワーフと共に竜に奪われた財宝を取り戻すべく、竜の棲む山を目指す冒険譚です。

映画と共に楽しみたい人には、岩波書店の瀬田貞二氏翻訳版をお勧めしますが、これから大学生として様々なことを学んでゆく皆さんには、是非こちらの山本史郎氏翻訳版を読んで頂きたいと思います。

上・下巻共に、本の1/3が本書の、もしくは『指輪物語』への注釈となっています。子供向けの物語と思わずに、注釈と併せて“英文学”として読んでみるのはいかがでしょうか？

喜多村 侑佳（職員）



小さいときには分からなかった
グリム童話の怖さが、今、分かります。

『大人もぞっとする初版「グリム童話」』
由良弥生 著（王様文庫）

私が今回紹介する本は『大人もぞっとする初版「グリム童話」』です。

グリム童話は、全世界の子ども達に愛されており、どちらかということも子ども向けの本というイメージが強いのではないのでしょうか。

しかし、グリム童話は、元々は子ども向けの話ではなく、例えば男女間の恋愛であったり、手足が切断される話であったりなど、どうして子どもに読み聞かせてあげられるような話ではなかったのです。

それを、子どもに読み聞かせてあげられるように、大人が何度も手を加えて、現在は誰もが知っている、素敵なグリム童話が誕生したのです。

そんな歴史のあるグリム童話の、子どもには教えてあげられない、大人が手を加える前のブラックな真実を、この本を読むことで知ることができます。

物語の深層心理を読み解くことで、さらにグリム童話の本当の怖さを知ることができるので、ぜひ読んでみてはいかがでしょうか。

栗原 希実（心理学科 2 年）



大学時代を自分のものにするために

『青が散る』

宮本輝 著（文春文庫）

とある関西地方の新設私立大学のテニス部を舞台とした青春小説です。不本意な大学入学をしてしまった主人公が、テニスサークルや周囲の人々との出会いと別れを通して成長していく物語です。

主人公をはじめとした登場人物の人生は決して楽々とは進んでいきません。しかし、それこそが二十歳そこそこの若者が体験する世の中のほんとうの姿ではないかと思えます。勉学はそこそこに、テニスに打ち込む主人公たちですが、勝利することがいかに難しいことであり敗れることがいかにつらく苦しいことであるかを実感して人間の内面の重要な部分を作りあげていく様子が伝わってきます。

そして、大学生らしく単位の取得にも苦しめられます。研究室から彼らを見つめる老教授の辰巳先生曰く、「若者は自由でなくてはいけないが、もうひとつ、潔癖でなくてはいけない。自由と潔癖こそ、青春の特権ではないか」。昭和50年代に出版された小説ですが、古臭さを感じさせないので一読の価値があります。

伍賀 正典（スマートシステム学科）



妖怪の中でもちょっと特殊な豆腐小僧が、自身の存在理由を求めて繰り広げる珍道中。

『豆腐小僧双六道中ふりだし』

京極夏彦 著（角川文庫）

ある日、豆腐屋の廃屋に湧いて出た妖怪、豆腐小僧。「手前はいったい何者でございましょう。」その答えを求めて、旅に出ます。行く先々で様々な妖怪と出会い、交流を重ね、妖怪の存在理由を教わりますが、どれもしっくりきません。珍道中を繰り返し、最後にたどり着いた答えは…。そこは読んでの楽しみ。

作者の京極夏彦は、膨大な民俗学的資料とその知識を背景に、妖怪の民俗学なるものを面白おかしく解き明かしていきます。日々の暮らしの中で、喜怒哀楽を呼び起こす様々な理不尽や、得体のしれないものに対する不安を緩和する緩衝材のような存在が妖怪なのだと。迷信?何が悪い!迷信を生み出す豊かな文化的背景こそが妖怪の神髄なのです。

小泉八雲(ラフカディオ・ハーン)が愛した、日本人の精神を学ぶ上でも役に立ちますよ。

小嶋 英二郎（薬学部）



長い文章が苦手!でも本から何かを得てみたい…。

そんな人におすすめの本。

『蜘蛛の糸』

芥川龍之介 著（文春文庫）

私のおすすめの本は、芥川龍之介が書いた『蜘蛛の糸』という本です。この本は、数ページというとても短いもので、長い文章を読むのが苦手という人にもおすすめです。短いため、内容はかなりシンプルなものですが、自分か他人、どちらを常に思いやるべきなのかを考えさせられました。

生前いろいろな悪事を働いていた者が、たった一度の善い行動をしていたため、地獄から救い出されるチャンスが巡ってきます。しかし自分が出られることばかりを、つまり、他の者のことを考えなかったため、また地獄へと墮とされた、というものです。

たしかに、他の人のことを考えるのは大切なことですが、自分のことしか考えられない場面は誰しもあります。追い込まれたときこそ、他人を優先すべきなのか否なのか、またそれを心がけることができるのか、とても難しい問題です。短いながらも課題を得られる、この本をおすすめします。

佐藤 桃子（人間文化学科 1年）



生きるとは？死ぬとは？その答えがここにある。
医学と社会史も盛り込んだ圧倒的ファンタジー

『鹿の王』

上橋菜穂子 著（KADOKAWA）

強大な帝国、東乎瑠^{ツオフル}に侵略されゆく故郷を守るため、命を捨てて立ち向かった戦士団、独角^{ドツカク}。

その頭であったヴァンは、奴隷にされ、岩塩鉱で労働を強いられる日々を送っていました。

ある日、その岩塩鉱を謎の犬の集団が襲い、ヴァン以外全員が謎の病で死んでしまいます。岩塩鉱から逃げ出したヴァンは、同じように生き残った幼子を拾い、2人の逃亡生活が始まります。

一方、東乎瑠の若き天才医師ホッサルは拡大する正体不明の病の研究のため、岩塩鉱から1人生き残ったヴァンを追うことになる。物語は、ヴァンとホッサルの2人の主人公を中心に、2人を取り巻く様々な人々と共に進んでいきます。

ファンタジー小説でありながら、戦争・病気・宗教・政治、私たちの世界とも無関係ではない様々な問題がリアルに描かれ、思わず引きこまれてしまいます。人とは、病とは、生きるとは何か。死ぬとは何か。「命」について考えさせられる、医学と社会史を盛り込んだ、圧倒的ファンタジーです。

末原 理那（メディア・映像学科1年）



思い出が少しずつ、君からこぼれてゆく。
だから君が思い出すまで、僕は読む。

『きみに読む物語』

ニコラス・スパークス 著，雨沢泰 訳（ＳＢ文庫）

認知証の妻を持つ夫が、自分のことを忘れないようにと妻が書いた自分たちの愛の物語を読み聞かせます。だんだん読んでいくうちに、妻も自分のことを思い出したように思えたが、それもほんのわずかな時間でした。

最後のシーンでは、2人一緒に死んでいくという死に方が印象的です。心から愛しているからこそ、眠ったまま永遠の眠りについたのだと思います。

私が深く感動したところは、親に交際を反対され、2人は別れを決意したものの、お互いが諦めきれずに駆け落ちをして、夫が妻のために建てた家で幸せに暮らしたということです。

私はこの場面での出来事を実際に体験したらと思うと、とても幸せだろうなと思いました。人生で心から愛して、愛されるパートナーを見つけたいと思いました。

ぜひこの作品を、1度は手にとってほしい。

徳田 滯（心理学科1年）



楽しみながら学べるコミックエッセイ。
意外と知らない日本語がここにある。

『日本人の知らない日本語』
蛇蔵，海野凧子 著（メディアファクトリー）

私のおすすめする本は、『日本人の知らない日本語』です。この本はコミックエッセイというジャンルで、日本語学校の教師である著者と外国人生徒たちの面白い体験談を漫画にしたものです。まるで嘘のような出来事が続き、私は笑いながら読み進めました。

著者と外国人との会話や質問の中では、日本語教師でも分からないマニアックなものもあります。それは外国人だからこその疑問でしょう。私たちは普段、見慣れていても意外と知らないことがあるということをこの本は教えてくれます。

ほかにも、外国の文化や日本語の種類・成り立ちといったことを学べます。また、各章の間には日本に来て驚いたこと、逆に帰国して起きた困ったことを四コマ漫画にしています。

活字が苦手な人や、日本語についてもっと学びたい人、外国のことを少しでも知りたい人以外でも楽しく読むことができる内容なので、ぜひ読んでみてください。



繰り返される非日常

『秋の牢獄』

恒川光太郎 著（角川ホラー文庫）

女子大生の藍は11月7日を繰り返される。

どこの場所に向かっても、どんな行動をしても、朝になるとまた同じ日々が繰り返され悲観的になるが、繰り返される非日常のなかで同じ境遇のリプレイヤーと出会います。彼らと過ごすうちに以前よりも穏やかな気持ちで11月7日を過ごすことが出来ましたが、一人また一人と姿を消していき、自分がいついなくなるのか分からない不安と明日を迎えることが出来るかもしれない心情に葛藤します。

リプレイもののSF作品ではありますが、どこか童話的かつ幻想じみた世界観で、どんどん引き込まれる内容となります。私がこの本を読んだ時期が大学生だったためか、藍の行動や考え方に共感する場面も多々あるため、非常に読みやすい作品です。もし、あなたが彼女と同じ状況に陥ったとしたらどのように過ごしますか？

平松 佳之（職員）



あなたも周りにある小さな植物たちに
目を向けてみませんか？

『植物図鑑』

有川浩 著（角川書店）

普段の生活の中で道端に咲いている花に気をとめる人はどれだけいるのでしょうか。少なくとも私は日々の生活の中で道に咲いている花や草を気にすることはありません。

しかし、有川浩の小説『植物図鑑』ではそんな野草や花などがメインの話です。この本は大雑把に言ってしまうと恋愛小説ですが、普通の男女が会って恋をする話とは少し違い、最初は、OL さやかが行き倒れの男イツキを見つける話から始まります。イツキは謎の多い男で、ある日、仕事で荒れるさやかを誘い野草採集に行きます。都会育ちのさやかには、初めてのことばかりで野草採集の面白さを知ります。終盤ではそんな二人の恋の様子が多くありますが、それまでの過程が野草がメインなのが面白いと思います。

普通の生活をしていたら、フキノトウや野苺なんて見ることはないでしょう。

しかし、この本を読むと、いかに身の回りに様々な植物や生き物がいるのかを考えさせられます。視野を広げるほど新たなことを発見できるので、と実感できる本です。

富士枝 杏（人間文化学科 1 年）



純粋な恋愛小説が読みたいときに！
必ず読み返したくなります

『ぼくは明日、昨日のきみとデートする』
七月隆文 著（宝島社文庫）

まず、このタイトルからどのような物語を想像しますか。その本当の意味は、すべて読み終わった後に知ることになるでしょう。

この物語は、主人公の高寿と愛美が出合い、恋に落ちていく恋愛小説です。序盤は2人の幸せそうなデートの様子など、ただの順調なカップルの話でした。

しかし、愛美には秘密があります。その秘密が明かされ、彼女の涙の理由を知ったあと、必ずもう一度読み返したくなります。

また、この本の魅力は細かい描写にもあります。2人がデートする三条大橋やスターバックスは京都に実際に存在するので、写真などを検索してみるとイメージしやすくなり、ストーリーをより楽しめると思います。

この本を読んだあとは「運命」について考えさせられました。毎日を大切だと思ふ人と一緒に過ごせることは幸せなことだと感じました。感動したいときはぜひ読んでみてください。

山本 彩名（人間文化学科1年）



本を読みたいけど、どの本を読めばいいのか
わからない時は、迷わずこの雑誌！！

『ダ・ヴィンチ』
(KADOKAWA)

毎月たくさんの本が出版され、どの本を読もうか悩んでしまう時にこの雑誌を読むと、絶対読みたい本が見つかります！

ありとあらゆる本の情報が掲載されており、文学はもちろんのこと、マンガや映画、ドラマなどの情報も充実し、いろんなジャンルの本に興味を持つことができます。

この雑誌は、今話題の本や、作家の紹介、これからヒットしそうな本や作家の紹介など、他にもたくさんの本の情報が掲載されています。

特に『今月のプラチナ本』のコーナーで紹介される本にはハズレがありません。インタビューも充実しており、作家の興味深い話が聞けたり、有名人の好きな本なども知ることができます。

もしも、どの本を読んだらいいか迷ったらこの雑誌を開いてみよう！

吉津 悠子（職員）

推薦図書リスト

- 『青が散る 上, 下 新装版』 宮本輝(文藝春秋, 2007年)
- 『あかはなそえじ先生のひとりじゃないよ : ぼくが院内学級の教師として学んだこと』 副島賢和(学研教育みらい, 2015年)
- 『秋の牢獄』 恒川光太郎(角川書店, 2010年)
- 『穴』 カフカ, 長谷川四郎, ゴーリキイ(ポプラ社, 2010年)
- 『アミ小さな宇宙人』 エンリケ・バリオス ; 石原彰二訳 ; さくらももこ絵
(徳間書店, 2005年)
- 『生き物を飼うということ : クワガタムシからニシキヘビまで』 木村義志
(筑摩書房, 2005年)
- 『池上彰のやさしい教養講座』 池上彰 ; 日本経済新聞社編
(日本経済新聞出版社, 2014年)
- 『大人もぞっとする初版「グリム童話」』 由良弥生(三笠書房, 2002年)
- 『環境危機をあおってはいけない』 ビョルン・ロンボルグ ; 山形浩生訳
(文藝春秋, 2003年)
- 『君たちはどう生きるか』 吉野源三郎(岩波書店, 1982年)
- 『きみに読む物語』 ニコラス・スパークス ; 雨沢泰訳
(SBクリエイティブ, 2007年)
- 『巨大翼竜は飛べたのか : スケールと行動の動物学』 佐藤克文(平凡社, 2011年)
- 『羅生門 蜘蛛の糸 杜子春 : 外十八篇』 芥川龍之介(文藝春秋, 1997年)
- 『心を整える。』 長谷部誠(幻冬舎, 2014年)
- 『国境の南、太陽の西』 村上春樹(講談社, 1995年)
- 『33 個めの石』 森岡正博(春秋社, 2009年)
- 『鹿の王 上, 下』 上橋菜穂子(KADOKAWA, 2014年)
- 『植物図鑑』 有川浩(角川書店, 2009年)

『進化とは何か：ドーキンス博士の特別講義』

リチャード・ドーキンス；吉成真由美編訳(早川書房，2014年)

『スイミー：ちいさなかしいさかなのはなし』

レオ・レオニ；谷川俊太郎訳(好学社早川書房，1979年)

『世界から猫が消えたなら』川村元気(マガジンハウス，2012年)

『前任将校：軍艦名取短艇隊掃投せり』松永市郎(光人社，1984年)

『そして生かされた僕にできた、たった1つのこと』

ダン・カロ；奥野節子訳(ダイヤモンド社，2012年)

『それマナー違反ですよ！』岩下宣子(宝島社，2014年)

『ダ・ヴィンチ』(KADOKAWA)

『千曲川ワインバレー』玉村豊男(集英社，2013年)

『知的複眼思考法：誰でも持っている創造力のスイッチ』荻谷剛彦
(講談社，2002年)

『豆腐小僧双六道中ふりだし』京極夏彦(角川書店，2010年)

『どがんね』佐保圭(日経BPコンサルティング，2015年)

『読書からはじまる』長田弘(日本放送出版協会，2001年)

『図書館戦争』有川浩(メディアワークス，2006年)

『都市を変える水辺アクション：実践ガイド』泉英明(学芸出版社，2015年)

『友だち幻想』菅野仁(筑摩書房，2008年)

『ナッチャン 1-21』たなかじゅん(集英社，2000-2007年)

『何を怖れる』松井久子(岩波書店，2014年)

『2005年のロケットボーイズ』五十嵐貴久(双葉社，2008年)

『日本人の知らない日本語』蛇蔵，海野凧子(メディアファクトリー，2009年)

『晴れた日は図書館へいこう』緑川聖司(ポプラ社，2013年)

『100回泣くこと』中村航(小学館，2007年)

『標準世界史年表』亀井高孝(吉川弘文館，2014年)

- 『標準日本史年表』 児玉幸多(吉川弘文館, 2014年)
- 『ピンクとグレー』 加藤シゲアキ (KADOKAWA, 2014年)
- 『ぼくは明日、昨日のきみとデートする』 七月隆文(宝島社, 2014年)
- 『星を継ぐもの』 ジェイムズ・P・ホーガン ; 池央耿訳(東京創元社, 1997年)
- 『ほとけの救い : 仏教入門』 寺内大吉(一栗社, 2008年)
- 『ホビット : ゆきてかえりし物語 上, 下 新版』 J・R・R・トールキン ;
ダグラス・A・アンダーソン注 ; 山本史郎訳(原書房, 2012年)
- 『幕が上がる』 平田オリザ(講談社, 2014年)
- 『〇に近い△を生きる』 鎌田實(ポプラ社, 2013年)
- 『マンガ水木しげる伝 完全版 上, 中, 下』 水木しげる
(講談社コミッククリエイト, 2004-2005年)
- 『道は開ける 新装版』 D・カーネギー ; 香山晶訳(創元社, 1999年)
- 『道は開ける : 決定版カーネギー : あらゆる悩みから自由になる方法』
D・カーネギー ; 東条健一訳(新潮社, 2014年)
- 『道は開ける 新訳』 D・カーネギー ; 田内志文訳(KADOKAWA, 2014年)
- 『L i f e : なんでもない日、おめでとう!のごはん。』
飯島奈美料理・スタイリング ; 大江弘之写真(東京糸井重里事務所, 2009年)
- 『ロボットとは何か : 人の心を映す鏡』 石黒浩(講談社, 2009年)

新入生にすすめる 50 冊の本 2016

2016 年 4 月 1 日発行

編集・発行

福山大学図書館運営委員会図書館企画部会

〒729-0292

広島県福山市東村町字三蔵 985 番地の 1

福山大学附属図書館

印刷 三原プリント株式会社

